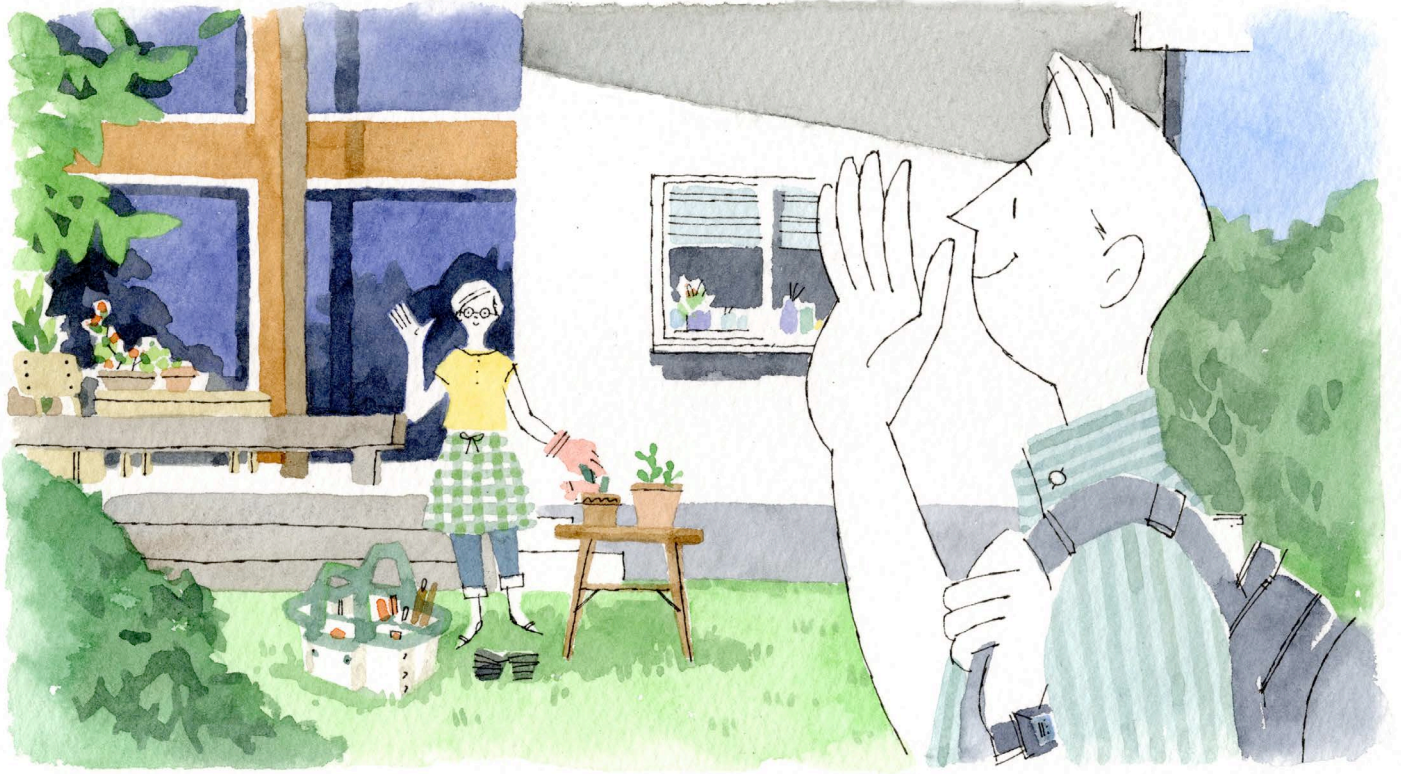




子どもの村東北

News Letter



今度の休みは母の顔を見に村に帰ろう。

第3回

おじゃまします。

初めて村を訪れた私と、村の人たち

子を持つ親にとって、思春期を迎えた子どもとの向き合い方は難しいもの。それは「子どもの村東北」で日々を過ごす育親さんにとっても同じ。特に子どもたちの進路については頭を悩ませたといいます。しかし、村を巣立った子どもたちが夏休みやお正月にこの村へ帰ってきた時、育親さんたちは心に磨きをかけたように映るその姿に自然と笑みがこぼれると語ります。「村を離れる時に、“いつでも帰ってきていいからね”という言葉を書いたのを覚え

ていたのかな。忙しい中でも、“ただいま”なんてフラッと帰ってきてくれることがあったんです」「なんだかハッピーな感じで、学校であつたいろんなことを教えてくれてね」「頑張っていることや将来の夢を話してくれたこともありましたね」「私の知らないところで経験した話を聞いていると、なんだか頼もしく思えてきますよ」心と体がぐんと成長する時期。成長した姿を見せることが、子どもたちから育親さんへの何よりのおみやげになっているようです。

しかしそんなエピソードに至るまで、育親さんたちたくさんの衝突も経験してきました。日々葛藤を抱え、時に涙を流したり、

つらい思いをノートに書きなぐったりと“薫にもすがる”日々があったそうです。「でも子どもって、私たちだけじゃ育てられないですから。いろんな大人たちに助けをもらうことで、子どもたちも私たちも今があるのだと感じます」とある育親さんが語れば、「そうそう。部活でも習い事でも、安心できる大人が近くにいることで子どもたちは自分らしくいられたのかもしれないですね」と頷く育親さんも。家庭と村、そして地域。さまざまなコミュニティに囲まれたこの環境は、子どもたちだけでなく育親さんにとってもたくさんの安心と豊かさをもたらしているようです。

(文・及川)

スタッフインタビュー

育親さんとともに、子どもたちにとって大切な家庭を支える村のスタッフ。

「普段どんな思いで仕事をしているの？」
「今後はこの村でどんなことをしていきたい？」
などを聞いてみました。

「子どもの村東北」で働く曾根さん、佐藤さん、宮崎さん。新たに村長に就任した曾根さんをはじめ、佐藤さんはソーシャルワーカーとして、そして宮崎さんはファミリーアシスタントとして、村で暮らす里親さんと子どもたちの生活を見守ります。

それぞれの想いを胸にこの村で働くことを選んだ中、曾根さんは「人生の延長線上で、村長の仕事に行き着いた」とそのきっかけを振り返ります。「長年音楽ビジネス

のフィールドに身を置いて、その中で起きた東日本大震災。以後、被災地に音楽を届けることに携わっていたのですが、現地に足を運んで一人ひとりの顔見ているうちにもっと個人に役立つ仕事ができないかと思っただけです。たぶん、これが人生最後の仕事。まったく違う分野から得た経験を通じて、子どもたちの力になれば」と語ります。

育親さんと子どもたちの暮らしを間近に感じながら働くということ。それは、育親さんとともに安心できる場所、そして村を一緒に作り上げていくということにもつながります。「子どもたちにとってよりよい環境を作っていきたいという思いからソーシャルワーカーの仕事に就きましたが、子どもの村での仕事は里親さんたちの生活の場、プライベートな場の支援に入る重要な仕事だと感じています」と語るのは佐藤さん。また、ファミリーアシスタントを経て育親を目指すという宮崎さんは、「家は人がゆつくり体を休める場所。そこに安心できる場所があるから働きに出ることができると、外での活動ができると思っただけです。だからこそ、ひとりの人間が健やかに育っていけ

るあたたかな家をつくっていききたいですね」と教えてくれました。

先日、曾根さんと佐藤さんは福岡県にある「SOS子どもの村 JAPAN」での研修に参加してきたそうです。スタッフがいいチームを作り上げることの大切さや地域住民と体となってコミュニケーションをやり上げていくこと、そして今以上に「子どもの村」の認知を広めていくことの重要性などを学び、佐藤さんは「経験したことすべてが勉強になりました」と振り返ります。今年の始めに福岡研修をした宮崎さんは、これから里親になるという環境の変化を踏まえて、「SOS子どもの村 JAPAN の常務理事である坂本雅子さんがおっしゃっていた、“Open Your House, Open Your Heart” という言葉が印象的でした。自分たちの考えをオープンにしておくこと、そしていろんな人の意見を取り入れる柔軟性が求められるんだな」と感じましたね。家庭という私的な領域の中で社会としての公的な仕事をするということが、私にとって新しい挑戦になりそうです」と、研修がたくさんの気付きを教えてくださいました。

育親さんと子どもたちの毎日を見つめ、寄り添い、時には手を差し伸べながら村全体を支える3人。これから挑戦してみたいことを聞いてみました。「育親さんと子どもたちにとってあたたかい存在であることですね。そして、支援の狭間にいる子どもたちに対して、枠にはまらない対応を柔軟に担っていききたいです」と佐藤さん。宮崎さんは「家と地域、コミュニティという広い枠組の中で「家庭をつくる!!」、ということをより深く考えていきたい」、そして村長として村全体を見守る曾根さんは「施設ではなく、小さなコミュニティとしてこの村を多くの人に知ってもらいたいですね。そしてコンサートであれば舞台監督である村長として、村のコミュニティを広めるための力になりたいと思います」と力強く語ってくれました。

3人の朗らかな笑顔は、きっと子どもたちの心を柔らかく解きほぐしていくはず。そして子どもたちに対するまっすぐな思いと育親さんへのやさしい眼差しが、この村の雰囲気を含んで以上にとややかにしてくれているでしょう。



村長
曾根 隆司



ファミリーアシスタント
宮崎 典子



センターハウススタッフ
ソーシャルワーカー
佐藤 桃子



* 子どもの村東北では、村で暮らしている里親さんのことを「育親」と呼びます。

トレンドワード

メディア依存

つい何時間も費やしてしまうゲーム、何気なく眺めてしまうスマートフォン、子どもたちの成長と発達に大きな関わりがある「メディア依存」について、「子どもの村東北」の理事・小児科医でもある田澤雄作先生に聞きました。

なぜ「メディア依存」になるの？

人間は「動く、光る、音が出る」ものに視線を向け、注視する本能があります。その機能を持つテレビに始まる「映像メディア」が登場し、繰り返し見て遊ぶことができるビデオやゲームが普及すると、約束を守れない、注意するときれるなどの「映像メディア依存」の問題が登場しました。さらに動画やゲームを手軽に楽しめるスマホの登場で、過去 8~10 年でメディア依存に関連する「発達障害」を抱えた子どもの数は約 4~5 倍に、そして青年では約 20 倍という爆発的な急増を招きました。

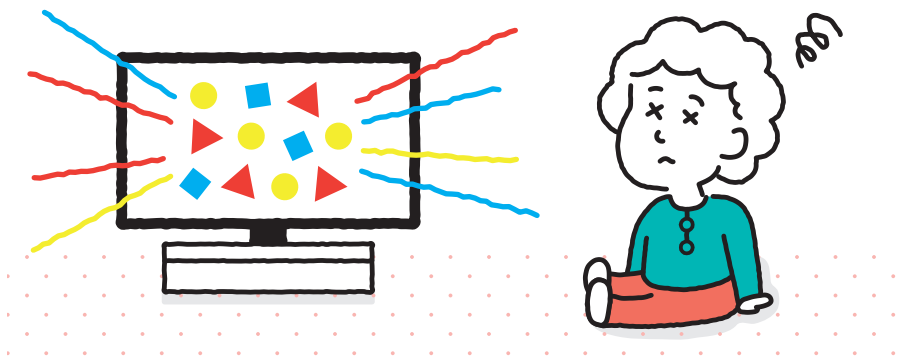
いるからです。自分が抱えている睡眠不足、疲労などの問題に気づかないまま長時間のゲーム・スマホで脳の疲労が進行すると睡眠障害が進行し、学校や会社に行く気力が奪われ、ゲーム・スマホをし続ける悪循環から抜け出せなくなるからです。2018年、「世界保健機関（WHO）」はゲームやネット依存は精神的疾患であると認定しました。麻薬依存と同じように、進行すれば認知障害として脳が壊れます。この事実は世界の常識でありながら、日本では知らない大人が多すぎる悲惨な状況です。改めて強調しますが、子どもがゲーム・スマホの遊戯時間を守れない、注意すると

どんな問題を引き起こすの？

子どもがゲームやスマホに時間を割くということは、大人になるために必要とされる現実世界での会話や遊び、食事の時間が奪われることになります。コミュニケーション力だけでなく現実世界での他者との接触が希薄なため、驚くことにのっぺらぼうや棒人間のように記号化された人間の顔や姿しか描けない子どもが大勢いることも事実です。

赤ちゃんの時からメディア依存は始まる？

“機嫌がよくなるから、手がかからないから”と赤ちゃんにスマホを手渡すお父さん、お母さんが多いのですが、赤ちゃんはスマホを笑顔では見ていません。



「きれる・暴れる」のは“依存の始まり”と認識すべきです。

「映像メディア依存」から抜け出すためには？

テレビを始めとする映像メディアからできるだけ離れることから始めましょう。自然に触れる時間を作ったり、家族で会話し、顔見ながら食事をしたりする現実体験をつみ重ねてあげる時間の中で、映像メディアから離れていきます。最初は子どもの反発に覚悟が必要ですが、早期に日常生活を改善できれば、1週間ほどで笑顔が見られるようになり、注意欠陥や多動傾向といった行動に変化が表れるで

“子どもをおとなしくさせる便利な道具”として悪用しているだけです。お母さんの9割がしてしまうスマホ片手の「ながら授乳」は母子が交わす「まなざし」を遮断し、母子の絆を育てません。依存症にならないようにと考えている親御さんも全体の3割ほどいますが、メディア依存は赤ちゃんの時から始まることを一般市民の知恵として知り、予防すべきでしょう。

ゲーム・スマホ（ネット）依存は大きな問題？

なぜゲーム・スマホをすると楽しいのか。それはゲーム中、人間の脳からは興奮と恍惚感を与えるホルモン（脳神経化学物質）であるアドレナリンやドーパミンなどが自動的に分泌される仕組みになって

しょう。ゲームやスマホなど“もの”で親子のつながりを求めるのは、最終的に親子の絆を損ない家庭崩壊を生じます。自分は生まれてきてよかった、生きていてよいという人間としての基本的な自尊心や“お父さんお母さん大好き”という心を育てることは、「ネット依存」から離れるために必要な鍵となります。

PROFILE

田澤 雄作（たざわ ゆうさく）

小児科医、医学博士。仙台医療センター元小児科部長。NPO 法人ワンダーポケット理事長、「子どもの村東北」理事。ネット健康啓発者養成全国連絡会議共同代表。著書に「メディアにむしばまれる子どもたち」教文館 2015 年。

